

Cattleya nobileior

カトレア・ノビリオール

カトレア原種マニアの間で大変人気の高いカトレア・ノビリオールですが、あまりその野生状態は知られていません。カトレア・ウルケリアナによく似た株と花で以前はおなじ種として扱われていたものが、現在では分離独立しノビリオールという種名が確立しています。主にブラジルに自生している小型のカトレアで、日本では手頃なサイズであることや、

株の大きさの割に立派な花を咲かせるので大変人気があります。反面、栽培についてはやや癖があり、水やりや日当たりを正しく与えないと思ったように開花してきません。原種の栽培を知るには、まず原産地から。そしてあとは日本の気候にあわせて応用を、が蘭栽培の基本です。

ノビリオールはブラジルの中で主に2カ所に分かれて自生しています。このページに掲載している写真は北部の自生地、首都ブラジリアよりも北のトカンティン州で見られるアマリエタイプと呼ばれるノビリオールです。非常に乾燥した厳しい気候の地帯で、熱帯のジリジリと照りつける猛烈な日差しが降り注ぐ場所です。1年のうち6ヶ月が雨期、残りの6ヶ月が乾期で、ノビリオールは雨期に生育し、乾期に開花する習性を持っています。乾期になると本当にからからに乾燥しバルブも驚くほどやせ細った状態で花を咲かせます。川も干上がってしまいノビリ奥ールの花や蕾は鳥についばまれて開花しているものも珍しくありません。このような自生地も周囲は家畜の放牧用地です。放牧地の拡張などでこれらの林は焼かれてしまい、当然木に着生しているノビリオールも焼き殺されてしまいます。蘭好きにとっては何ともったいない、かわいそうな話ですがそこに住む人々にとっては放牧地確保の方がはるかに重要なわけです。何とかならないものかなといつもこのような自生地を訪れると考えさせられます。

ノビリ奥ールのもう一つの自生地はブラジル南西部・マトグロッソス州周辺にあります。こちらも環境的には似ているのですがトカンティンほど乾燥はしないようです。ここに生えるノビリオールはピンク味の強いいわゆるチポタイプ、もしくはマトグロッソタイプと呼ばれる種類です。これらの野生状況は次のグラビアページでお楽しみください。

根は木の樹皮を縫うようにして長く長くのびている



しっかりと木にしがみつき開花するノビリオール(9月)



トカンティンの乾燥した大地を一路ノビリオール目指して。気温は40度以上



雨期になると川になるところの両岸に生える木にたくさんのノビリオールが着生している



鳥についばまれた花

道中見つけたカシューの実、猛烈な暑さと乾燥の中この赤い実の水分が口の渇きをいやしてくれる



やせ細ったバルブにしっかりと開花している



放牧地確保のために焼き払われたノビリ奥ールの林